
Silver Blade

暁 桃香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Silver Blade

【Nコード】

N7572T

【作者名】

暁 桃香

【あらすじ】

ひよんな事で死んでしまった、銀魂の主人公『坂田銀時』。

彼は前世の記憶を持ったまま、魔力で機械やゴウレムを動かす世界で、『ライガット・アロー』として転生してしまう。

しかし彼には魔力が一切なかった。

これはライガットになってしまった銀さんの、波乱万丈な物語。

Silver Blade キャラクター設定（前書き）

ブレイクブレイドのライガットに、銀魂の坂田銀時が転生する話です。

ブレイクブレイドの二次創作がないので作ってみました。

更新は遅いと思います。

駄文だと思います。

それでも良い方は、楽しんでいただければ嬉しいです。

Silver Blade キャラクター設定

ライガット・アロー

身長177cm、年齢25歳。

アンダーゴウレム「デルフィング」の副責任者兼専属搭乗士。

かつて、攘夷戦争で敵からも味方からも恐れられた武人『白夜叉』で、万事屋銀ちゃんのオーナーだった坂田銀時。

ひよんなことで死んでしまい、前世の記憶を持ったまま転生した。原作ライガットと比べると若干背が高く、髪も金髪ではなく銀髪。死んだ魚のような目、ということ以外は原作ライガットと一緒に。

天然パーマでは無くなったことを喜んでいる。

原作ライガットと同じで、100万人に1人の確率で生まれると言われる魔力無者で、機械や生活用品の一切を使えない。

アン・ソーサラ

『能無し』と呼ばれても全く気にせずほっとしている。

前世同様でたらしめな強さと身体能力は健在で、機械なしでも畑仕事はさほど問題なし。

めんどくさがりだが、気さくな性格と人を引き付ける魅力があるため村の人や、後に軍の人達からも慕れている。

シギユンの事が好きで、シギユンからも好意を寄せられているが本人は鈍感なためまったく気づいていない。

そのため、『アッサム国立士官学校』を退学しなかなか会う事ができなくなり、シギユンはホズルと結婚してしまう。

恋が実らなかった哀れな男。

後に追加していきます。

Silver Blade 第1話

周りが石英と呼ばれる石を手のひらで浮かせている不思議な光景の中、たった一人銀髪の少年だけは浮かせることができなかった。

「とうちゃん？」

少年は父親の方を向く。
父親は頭を抱えていた。

「……もつと軽いのは無いのか……？」

「……残念だよアローさん……」

一人の男が父親の方に手を置く。

「2歳児でも浮かせられるものだ……5歳でも浮かせられないという事はこの子は……この子は――「能なし（アン・ソーサラー）」だ……残念だよ……」

銀髪の少年は落ち込んでいる父親をじっと見ていた。

Silver Blade 第1話

―20年後―

「（ニタツ）」

鍬をもった青年が一通の友人からの手紙を読み笑う。
青年は急いで旅支度を整え家を飛び出す。

「まちやがれクソ兄貴ッ！」

青年の弟が怒鳴りつけるが青年は走りつづけた。

「弟よ王都土産期待してろ！」

そう言っつものすごい速さで駆けて行つた

「・・・収穫やりたくないから逃げやがったな・・・まったく何のために留学してたんだよ・・・くそッ！」

弟は、兄が駆けて行った方を見ながらそう言った。

地中からオイルが採れない世界、
―クルゾン大陸―。

人々が物を動かす原動力として「選んだ」のは・・・、

人の手に宿る「力」。

老若男女、誰もが生まれつき、
微力ながらも特殊な「力」を持っていた。

地中から採れる石英に、
誰もが『命令』を与える事が出来た。

人々は柔軟性の高い石英を精製し、
意のままに伸縮させれる「靱帯」を作り出す。

「靱帯」はカムを動かす動力源となり。

空気を圧縮させるピストンの動力源となり、
弾丸を排出させた。

強弱はあるものの、
誰もが石英を使える「力」。

人々はそれを「魔力」と——呼んでいた。

しかし。

「あじく……」

銀髪の青年……ライガット・アローは違った。

「ちくしょーホズルの野郎……」

彼は、刀を杖代わりにしてトボトボ歩きながらボヤク。

「たく、なんで俺とレガッツには魔力がねえーんだよ。つか巨大口ボがあるくせに、技術は前世の方が発展してるってどういうこと？」

彼には前世の記憶がある。

かつて攘夷戦争という、天人と呼ばれるものたちとの戦争に参加し、敵はおるか味方からも恐れられた武人、『白夜叉』坂田銀時という男だった。

終戦後は万事屋銀ちゃんのオーナーを務め従業員たちと仕事をしていたが、ひょんなことで死んでしまい、気づくとこの世界に転生していた。

前世では銀髪天然パーマの赤い死んだ魚のような目だったが、今は銀髪はそのままだが天然ンパーマではなくなり、目は死んでいるが青い瞳で骨格まで変わっている。

本人は天然パーマでなくなった事を喜んでいる。

性格は前世同様めんどくさがりだが、気さくで義理人情を大切にする男だ。

人並み外れた、でたらめな強さと身体能力の持ち主なのだが……

。

「も・・・ダメ」

バタッ。

さすがに5日も歩きっぱなしでは限界も来る。

ライガットはバツタリ倒れてしまった。

そこに。

ギイイイイイイ

ガザッ

バイクが走って来る音が聞こえたかと思えば、ライガットのすぐ近くに止まった。

「ライガット・アローだな？ホズル国王がお召しだ！」

なかなか渋い男の声が聞こえた。

「・・・だ・・・誰・・・だ・・・？・・・み・・・水う・・・」

ライガットはもはや死にそうになっていた。

男は、ライガットに水筒を渡す。

よつぽど喉が渴いていたのだろ、勢いよく飲み始める。

「本当に、この辺りで倒れているとはな・・・ホズル様の仰っていた通りだ」

男は白い髪をオールバックにし、髭を生やし、サングラスをかけ黒いクリシュナの軍服を着、歳は40後半ぐらいに見える。

ライガットは水を飲み終え、男の言葉に答える

「・・・俺は魔動技術で動く乗り物が扱えないから・・・それを計算したんだろ。あいつらしいよ・・・」

ライガットが言うと男は珍しそうに、

「・・・本当にいたのだな・・・『魔力を持たない者』・・・!」

ライガットを見ながら言った。

その言葉を言われたら、怒る者もいるかもしれない。

しかし、ライガットは気にしていないのか、

「ん? あんた『能無し』に会うのはじめてか?」

と、軽く答えた。

「ああ、生まれて初めて会った」

「ま、そりゃそうか」

ライガットは砂埃を払いながら立ち上がる。

「で、あんた誰?」

「クリシュナ王国の將軍——バルドだ。ライガット君を王都に案内する」
ピノテン

ライガットは『將軍』という言葉に顔を引きつらせた。

「しょ・・・將軍？將軍閣下直々のお出迎えですかあ？」

「たくホズルの奴いつたい何考えてんだ・俺みたいな農民にわざわざ將軍閣下を向かわせやがって」

「それだけ大切な友人だと思っているのだろう、あの方は」

現在ライガットはバイクの後ろに乗って、王都ピノンテンに向かっていた。

ライガットとバルドはすっかり打ち解けている。

もともとライガットは誰とでも気さくに話ができる性格で、いろいろ滅茶苦茶なところがあるが、誰にでも好かれる青年だ。バルドも例外ではない。

「王都が見たぞ」

「やっとなついたぜ！」

5日かかってようやく付いた王都に喜ぶライガット。しばらく走ると警備のゴウレムがいた。

「バルド將軍！ご苦労様です！！」

ゴウレムの搭乗士がバルドに向かって言う。

「警戒ご苦労」

バルドも搭乗士に向かって言う。
「そんなやり取りを見て、

「・・・あんだ、本当に將軍だったんだな」

ライガットが言った。

「ライガット王都ははじめてか？」

活気あふれる王都を走りながらバルドが聞く。

「いや、ガキン時に一度親父に連れられて来たかな」

ライガットは周りを見ながら答えた。

城についたライガット達はホズルのいる王座の間に向かう。

「そういえばライガット、さっきから気になっていたんだが、お前『刀』を使うのか？」

バルドはライガットの左手で持っている『刀』を見ながら聞いてきた。

「ああ、俺銃とか使えないからな」

「そうか、いつ頃から習っている？」

バルドはライガットの体格や身のこなしを見てかなり前から、武術を誰かに習っているのだと思っていた。しかし、

「いや、習ってねえよ」

「なに？」

「大体5歳ぐらいから鍛えはしてるけど、俺のは我流だ。」

「！」

バルドはライガットの言葉に驚いた。

なんせ隙のない身のこなしからかなりの使い手であることは、軍人で將軍である彼にはすぐに見抜く事が出来た。

が、誰からの訓練も受けずに我流で今のライガットのようになるのは難しい。

なれたとしても、過酷な訓練をつんでいないところはならないだろう。

「（惜しい、この男なら凄腕の魔動戦士になれただろうに）」

バルドは、ライガットに『魔力』が無いことを心の底から惜しんでいた。

「それにこいつは昔っからつかってるからな（ボソ）」

『刀』を見ながらのライガットのつぶやきは、バルドには届かなかった。

「いつかお前の腕前を見たいものだな」

「ま、機会があればいつでも見せてやるよ」

そんな会話をしながら歩いていると、

タッタッタッタ。

「ライガット・アローー!!」

聞きなれた懐かしい声が後ろから聞こえた。

「!シギユン!4年ぶり・・・!??(。□。)」

振り向くと、銃口をこちらに向けて睨んでくる金髪の長い髪に青い瞳で、赤い軍服に魔道技術士特有のフードを被った美女・・・シギユンがいた。

ライガットは両手をあげて顔を引きつらせる。

「シ・・・シギユンさん・・・??・・・そんな物騒なものに向けて・・・なんでしょうか??」

ギロツ

シギユンはライガットの言葉に更に睨みつける。

「どうしてホズルと私の結婚式に来なかったの!??」

ギクッ

「・・・・・・色々・・・忙しかったんだよ・・・」

ライガットは視線を泳がしながら言った。

グッ

「親友の結婚式より大事な事って何？」

シギユンは銃口をさらに前に出し聞く。

「い・・・色々あんのさ！収穫とか！！」

ライガットはあわてながら言う。

しかし、本当の理由は。

「（いけるか！好きな女が親友とはいえほかの男との結婚式になんて！！お前らは俺にみじめな思いさせたいのかこの野郎！！）」

ということだった。

当たり前の話である。

「・・・私たちを嫌いになつたわけではないのね？」
「あ？そんなことあるわけねえだろボケ！！！！」

ライガットは呆れながら言う。

ダッ

ガッシ！

ライガットの言葉を聞くと、シギユンはライガットに抱きついた。

「会えて嬉しいよ・・・ライガット・・・」
「（フッ）」

そんなシギユンに微笑むライガットだった。

そんな光景を上から見ていた3人組がいた。

「・・・シギユン様が笑顔を・・・？あの小汚い男何者だ！？」

褐色の肌で黒い短髪の男が悔しそうに言った。
シギユンファンのようだ。

「陛下とシギユン様の学生時代の友人らしいよ」

同じく褐色の肌で長い髪をスペードの飾りがついた髪留めでポニテールにしている女が言う。

この二人は兄妹だ。

「ああ・・・例の『能無し』か・・・」

金髪の髪をオールバックにした目つきが悪くて厳つい顔つきの男が言った。

眉毛も無いため、顔だけ見たらヤクザに見えます。

3人とも黒い軍服を着ている。

「100万人に1人の確立で生まれると言われていて、魔力をまったく持たない者——ね。魔力が無いからゴウレムどころか耕運機も動かせないらしいね」

「大昔では親が排除してたらしいぜ？こえー。ハハハ」

褐色の女は不思議そうに言い、褐色の男は笑いながら言う。

・・・正直笑って言える内容じゃない気がするが。

「陛下も『能無し』の役立たずを呼んで思い出話でもしたくなっただのかね」

褐色の女はライガットに対してかなり失礼なことを言った。

「ホズル様、ライガット様をお連れしました」

王座の間についたライガット達3人。
しかし王座には誰も座っていない。

「よう！」

窓際の方から声がしそちらを向くと、

「ご苦労さん、この椅子いいだろう？」

前後に揺れる椅子に座った褐色の肌に黒い長髪、がたいがよく長身で、こげ茶色の、軍服に白いマントを着た王・・・ホズルが手を振っていた。

「妻・国民として、王座を嫌う国王ってどうよ？」

呆れながら言うライガット。
シギユンも視線をそむける。

「聞こえたぞその愚民め。国王侮辱罪で、死刑！」

そんなことを言っているが、まったく本気で言っていない。
もちろんライガットも分かっている。

これは久しぶりにあった友人同士のコミュニケーションだ。
なのでライガットも、

「はぁ～：あのな召喚令状がきて、5日もかけて死にかけながらも王都にたどりついた民草に対してそりゃねえだろがコンチキショ！
テメエはクリシュナかつてない暴君ですかぁ～？ホズル様よぉ～！」

召喚令状を見せながらふざけた口調で言った。

まあ、彼がまじめに話すときは真剣な話の場だけだ。

その真剣な話のときですらぶち壊しにすることもあるが。

「おグラムも大きくなったな」

ホズルの近くにいる、大きな黒ミミズクがに言うライガット。

「ライガットよく来てくれた」

「ていうか呼びだすなら用件ぐらい書いとけ！『アッサム国立士官学校』24期生の問題児4人衆で同窓会でもやんのか？」

「・・・問題児？」

バルドは『問題児』という言葉に疑問を持つ。

「そつ。王位を継ぎたくないから空ばかり見て落第点を取ろうとする皇太子！三日三晩飲まず食わずで学校の研究室に籠るマッドサイエンティスト！」

「追試王！」

「うつ；」

「はっはっは」

ライガットの言葉に反抗するようにシギユンが容赦なく言い。

それに顔を引きつらせるライガット。

その光景を見て笑うホズル。

王、王妃、農民のする光景ではない。

「あとはカタブツゼスがいりゃあ勢ぞろいか・・・あいつも呼んでるんだろっ？」

ザワツ

ライガットが言うと、周りの空気が重くなった。

「？」

ライガットはどうしてこうなったのか解らないでいた。

「ライガット、お前知らんのか？」

「何が？」

ホズルが聞くがライガットは何が何だかわかっていないようだ。

「村で何か噂話はきかなかったか？」

「いや？村への買出しは月2回ぐらいだし、最近は弟に行かせてたからなあ・・・（めんどくさくて）」

バルドも聞くがまったく知らないライガット。

そんなライガットにシギユンが話し出す。

「——1カ月前、アッサムでクーデターが起こったの。アテネスとオーランドの両大国が武力介入してアテネスが勝利した。つまりアッサムは、もう中立国じゃない・・・アテネス連邦領」

シギユンの話を聞き死んだ魚のような目から、真剣な目変わったライガット。

シギユン、ホズル以外の者達はその変りように驚く。

「チツ、知らねえ間に隣の国は戦争してたのか・・・」

「もう隣国の話ではないんだ。ここからはまだ国民に公表していないが・・・アテネス連邦はすでに我が国の^{クリシュナ}国境も侵している」

「おい、まさかアテネスの連邦軍指揮してんのって・・・」

ライガットは嫌な予感がした。

そしてその予感は、

「ああ、アテネス連邦軍を前線で指揮しているのは、あのゼスだ」
当たってしまった。

「・・・何やってんだよあいつ；！あの人一倍戦嫌いの奴が・・・
まあ、確かにアテネスの天才戦士だったからな。いくらアテネスの
最高司令官ヘクトルについている兄貴を、止める役になりたいって言っても、
軍にいる以上命令は無視できるわけねえ・・・」

普段とは違うライガット。

彼は前世でも過酷な戦争を戦い抜いた経験がある。

武器が違えども戦争とは同じものだ。

上の命令に従って行動する。

そのことは良く知っていた。

「敵の本隊は国境付近の砦で何とか足止めしているが・・・小国の
我が国では崩れ始めるのは時間の問題だろう。すでに最終防衛ライ
ンを突破している。敵小部隊もいるらしい・・・」

「てことは、今この国に攻め入ってきてもおかしくない状況か・・・」

「

ホズルとシギユン以外は思った。

この男は本当に農民かと。

まるで幾多の戦場にまみえ、戦い抜いてきた者の冷静な意見の出し
方だ。

そして、バルドは思うのだった。

「（やはりこの男は惜しい）」

と。

「で、俺を呼んだ理由は何だよ？」

「ライガット、力を貸してくれないか？」

ホズルは単刀直入にいった。

「おいおい、俺は小銃ですら撃てないんだ。知ってんだろ・・・」

「とか言って偽の弾とはいえ、銃を持った相手数十人の訓練教官にたった一人、木刀一本で勝ち抜いたのはどこの誰だ」

「なんですと!？」

この部屋に初めからいた家臣達が驚きの声を出す。
当然だろう。

訓練教官とは元軍人。

それもエリートだったものしかないのだ。

それをたった一人で数十人も訓練教官を倒してしまったのだ。

『能無し』と言われ、見下されている存在に。

そんな中バルドは予想していたようで驚いていなかった。

むしろますます欲しい人材だと思っている。

「ついて来てくれ」

そんな家臣達を無視する。

ホズルはついてくるように言い、ライガットと王座の間から出ていく。

そんな2人の後ろ姿を見ながらバルドは、シギユンの問いかける。

「シギユン様お聞きしたい事が・・・」

「何でしょう將軍」

バルドの言葉の答えるシギユン。

「あの男、陛下の信頼が厚いようですが、何者ですか？」

「私たちの学生時代の友人ですが？」

「いえ・・・ただの、ご学友にしては・・・」

「ああ・・・」

バルドの聞きたいことが分かったシギユン。

「——学生時代——軍事大国総司令の弟と、一国の皇太子の喧嘩を・
・止められ唯一の男・・・そして・・・」
「？そして？」

一拍置いてシギユンは続けた。

「『アッサム国立士官学校』のエリート訓練教官相手にたった一人
木刀一本で撃退した『サムライ』」

「『サムライ』とは？」

「古代のとある国の剣士の事をそう呼んでいたそうです。私もライ
ガットに聞くまでまったく知らなかったんですが、『己の守るもの
を刀一本で貫き通し、義理人情に厚い剣士』という事を書物で調べ
ました」

「ほう・・・」

バルドは感心しながら聞いていた。

そのような剣士が古代にはいたのだなと。

「変な奴なんです」

そういったシギユンの言い方にまさかと思うバルド。

「・・・シギユン様、貴女もしかしてあの男を・・・」
「はい？」

「あ！いえ！出過ぎました！ははは若いとはいいいですね！」
「？」

「陛下だ！！！」

「ホズル様あ——！！！」

現在ライガットとホズルは兵士が運転する車内で王都の街を走行中だ。

「ライガット、親父さんは元気か？」

「んあ？去年死んだよ」

「何だと！？」

衝撃的な言葉に驚くホズル。

「埋葬式は！？何故呼ばなかった！？」

少し怒った風に言うホズル。

「式なんかやってねえからな・・・やったところで、誰も来るわけない」

そんなホズルに何でもないように答えるライガット。

「能無しをふたり育てて、借金までして俺を士官学校に入れた男だぞ。魔力が芽生えると信じてよぉ・・・馬鹿な親父だ・・・」

「だが運命に抗おうとした・・・素晴らしい親父さんだと思うぞ！」
「・・・・・・・・」

ライガットは黙って聞いていた。

「・・・・・・・・俺は・・・抗えん・・・！」

ピノンテン郊外の石英採掘場の地下へと続く階段を下りていく2人、しばらくすると、

「おおッ・・・・・・・・！？ゴウレムだよな・・・・・・・・何で石英に埋まってるんだ！？」

石英に埋もれているゴウレムに驚くライガット。

「これは先月、この採掘場から掘り起されたシロモノだ。」

ホズルは石英に埋もれたゴウレムに触れながら言う。

「推定千年前のゴウレム・・・アンダー。ゴウレム（古代の巨兵）と言ったところか」

「！？古代・・・（てことは前世の『カラクリ』に近いってことか

「？）」

そんなことを考えながら見ていると、近くに何かあることに気づく。何だろうと思いつきながら見てみると。

「どわぁ！？」

そこにはミイラがあつた。

「搭乗していた古代人だ」

ホズルが何でもないように言い、話し続ける。

「驚く事にその古代人は石英を使った形跡がないんだ。つまりこのゴウレムは魔力では動かんという事かな・・・」

「そりゃ、千年前って言ったらまだ石英やら魔力やらに頼ってなかった時代だったて事なんじゃねえの？」

「・・・・・・・・」

ライガットの言葉に驚くホズル。

「・・・・・・・・ライガット、お前って馬鹿なのか頭良いのかどっちだ？」

「・・・・・・・・お前、俺を貶してんのかこの野郎・・・・（ピクピク）」

ホズルの言葉に顔を引きつらせて言う。

ライガットはコックピットの中をのぞく。

やはりそこには出力石英も操作石英もなかった。

「我が軍の高位魔道戦士達を乗せてみたが誰ひとり動かせなかった・・・・」

「そりゃ動力源が違えば、動かし方も違ってくるだろ」
「……………」

ライガットの突っ込みに黙るホズル。

「ゴホン、まあここからはある魔道技術士の仮設だが、古代人は魔力を持たない種族で——さっきお前が言った通り、魔力を使わずにゴウレムを動かしていたのではないか？」

「それもっ仮設じゃなくて事実だと思うぞ」

「……………」

先ほどからライガットの突っ込み炸裂である。

「ライガット……ここに留まってこいつの研究を手伝ってくれんか？お前の弟は我々が責任をもって非難させる！」

「ふうむ……俺が力になれるとは思えんがなあ（第一ガソリンで動いていたら、こいつただのガラクタじゃねえか）」

ライガットは考え込む。

「こいつの解析が進めば我が軍のゴウレム強化につながるかもしれない」

「そんな時間あんのかよ？」

「！」

ライガットの言葉に固まるホズル。

「敵の指揮している奴がゼスだとしたら、こいつの解析しているうちにとっとと攻めこめれちまうよ。たとえ解析できたとしても、強化までにかかりの時間がかかる事ぐらい俺にでもわかる」

ライガットの言葉を苦虫をかみつぶしたような顔をして聞くホズル。ゼスのことをよく知っている2人だからこそ、そのことはよく解っていた。

「・・・なあ、ホズル・・・本当にアテネスと戦争する気か？勝てる相手じゃねえぞ」

「・・・確かにお前の言うとおりだ・・・だが」

ゴオオオオオ

ホズルの言葉をさえぎるように地響きが鳴り響く。

「!？」

「・・・思っていたより早い・・・!この速さで攻めてくるとしたら奴しかない、ゼスだ・・・!!」

「チッ」

突然の攻め込みに舌打ちする。

今すぐにでも攻めてくる事は解っていたが、やはり嫌なものだ。

「・・・実はアテネスが国境を侵した時から、和睦の使者は送っていたんだ・・・アテネスからも返答で和睦の条件を提示してきている」

「なんだよ、和平出来んじゃねえか」

ライガットはほっとしたように言う。

これで親友と戦わずに済むと思った。

「・・・条件は・・・『クリシュナ全土の自治権をアテネスに移行』

『五等爵など全ての爵位剥奪』」

「飲むしかねえだろ、お前も世襲で人の代表を決めるなんてくだらないって言ってたろ」

ホズルにとっても悪い条件ではないはずだと思った。
だが、

「それと——『クリシュナ王族の全員処刑』」

「なあ!？」

最後の条件はあまりにも残酷だった。

「平民出だがシギユンも含まれる。大臣やシギユンの前では王として振舞わねばならん・・・ライガット・・・教えてくれ・・・」

ライガットの前で見せている彼の顔は、

「俺は・・・」

王の顔ではなく、

「・・・どうすればいい・・・?」

何もかも諦めようとする男の顔だった。

Silver Blade 第1話（後書き）

はじめまして。

今回はじまりました銀魂×ブレイクブレイドのクロスオーバー小説。ブレイクブレイドの二次創作が無かったので、私なりに作ってみました。

更新は遅いと思いますが、よければ最後までお付き合いください。

Silver Blade
第2話

Silver Blade 第2話

┐
┐
•
•
•
•
•
┐
┐

ホズルの言った和睦の条件はあまりにも残酷な内容で、さすがのラ
イガットも絶句していた。
暫く沈黙が続いたが、

「~~~~~」（わしゃわしゃ）・・・そんなクソ条
件のめる訳ないだろッ!」

ライガットは頭をかき、怒鳴りちらすように言った。

「最後の条件は書面ではなく使者の口頭で伝えてきた……さすがだよ……口キス書記長にとって和睦は下策だ勝てば全てが手に入るからな」

「・・・・・・それだ」

ホズルは他人事のように微笑みを浮かべながら言った。

そこでライガットはあることを思い出す。

ゼスがホズルによくからんできたことだ。

あの頃はただ止めに入っただけで、喧嘩の原因など深くは考えなかったが、今ようやくわかった。

「・・・ホズル・・・ゼスがよくお前からからんでは、それだツ・・・！」

ライガットはホズルを指さし、怒鳴る。

「そうやって・・・自分の命がヤバイくせに他人事のように笑っていやがる・・・！何もかもあきらめたように・・・！！あの無口なゼスが、お前からからんでたわけだ！！」

ライガットの怒鳴りながらの言葉を、困ったように笑いながら聞いていた。

「すまん・・・」

「・・・謝んじゃねえよ・・・怒ってんじゃねえからよ（わしゃわしゃ）」

「・・・ゼスは俺には特に厳しかった・・・俺を疎んじていたのかな？」

ホズルの言葉にライガットは呆れたようにいう。

「んなわえねえだえろアホ。逆だ逆！」

ライガットはコックピットの前に立つ。
そしてこう言った。

「人の一生は重き荷を負って遠き道を往くが如し、」
「ライガット、その言葉は？」

聞き覚えのない言葉にホズルは首をかしげる。

「サムライがいた国の天下を取った將軍様の言葉だ」

「サムライの？」

「最初にきいた時は何を辛気くせーことをなんて思っちまったが、
なかなかどーして年寄りの言うこたアバカにできねーな・・・」
「・・・・・・・・」

ホズルはライガットの言葉を真剣な顔をして聞く。

ライガットの話は、今まで聞いたことのない言葉が多い。

そのどれも、彼らが立ち止りそうになった時、後押しするかのよう
にライガットが話してくれる。

今回もそれだ。

「荷物ってんじゃねーが、誰でも両手に大事に何か抱えてるもんだ。
だが、かついでる時にや気づきやしねー」

ライガットは、かつての幼馴染みに言ったことを話す。

今のホズルには聞かせるべきだと思ったからだ。

「その重さに気づくのは全部手元からすべり落ちた時だ。もうこん
なもん持たねえと何度思ったかしれねエのに・・・またいつの間に
か背負いこんでんだ」

「ライガット・・・」

「いつそ捨てちまえば楽になれるんだろうが、どーにもそーゆ気にな
れねー」

ライガットはホズルほ方を向く。

「・・・何でもやってやるよ。おめえらいねーと、歩いててもあんま面白くななくなっちゃったからよオ」

「ライガット・・・！」

ライガットの言ったことに喜ぶホズル。

「ただし過度な期待はすんな！？俺はいろんな意味で限界値が低いんだ！」

「あっはっはっは」

ようやくいつものホズルに戻り、安心するライガット。

「（たくよお、ホズルとゼスには毎度のことながら困ったもんだぜ）」

「

見た目はホズルと同じ25歳だが中身はそれ以上なので、学生時代よく世話をやいていたライガットだった。
それは今も変わらずにいる。

「陛下ッ！！ご非難をッ！！」

「？」

「何だ？」

大慌てで階段を下りてくる兵士達。
2人は何事かと思った。
その時。

ズンッ！

ドンッ！

「おわらあッ！？」

地上の方でゴウレムが勢いよく転倒し、その衝撃が地下にまで及ぶ。その衝撃で木できていた足場が崩れ、ライガットはバランスを崩し落ちそうになるが、コックピットのハッチにつかまり難を逃れる。

「あつぶねえゝゝ」

「ライガット！！」

ホズルがグラムを抱え、慌てながらライガットを呼ぶ。
グラムは目を回して気絶する。

「ああゝ、大丈夫だ」

ハッチにぶら下りながら言う。

そうしている間も、地上では敵ゴウレムの攻撃は続く。

「陛下ッ！ご無事ですかッ！！」

兜を被った兵達がホズルに駆け寄る。

「俺は問題ない！ライガットを助けてくれ！！」

「俺は後でいい！早く行け！！」

「ライガット！？」

ライガットの言った事に、何を言っているんだと思うホズル。

しかし、

パラパラ

周りの壁が今にも崩れそうな状態。

その上、ライガットのいるコックピットまでは微妙に遠く、梯子がなければ救出できない。

「早く行けッ！お前は国王なんだぞ！！」

「ライガット・・・」

「お前の両手に抱えてるもんは俺なんかよりよっぽど多いんだ！ゼッテエー手放すんじゃねえー！！」

「！！・・・（コクッ）」

「ささ！陛下！！」

ライガットの説得に頷いたホズルを、急かしながら非難させようとする兵士たち。

「頑張れよ！すぐ助けてやるからな！！」

非難しながら、1人の兵士がライガットに向かって言った。

「って言われてもなあゝ；・・・とりあえず中に」

ライガットはコックピットに入ろうとして、ハッチの取っ手を握る。

カチッ

ガクッ！

「おわッ!？」

ボフッ!

バタンッ!

取っ手を握ると、ちょうど親指が取っ手のスイッチを押してしまい、勢いよくハッチが閉まる。

その拍子に、搭乗席に押し込まれてしまったライガット。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

真っ暗になって何も見えない。

ハッチを開けようと思ったが、取っ手がどこにあるか解らない。

「・・・・・・・・どうするかなあゝ；・・・・このままだと窒息死だゝ」

このまま密閉空間にいたら、間違いなくそうだろう。

ゴソゴソ

「とりあえず何かないかあ？」

ゴソゴソ

ライガットが手探りであたりを探る。
すると、

ピッ

「！？こいつは！！」

ライガットが右手の親指で丸い感じがするところを触ると、前方にある四角い板・・・モニターが光った。

ライガットが触った所はモニターの下、右横の青く光っている石のようなところだった。

そのすぐ近くには、この時代には無い、パソコンなどの電源のマークがあった。

「液晶画面！？」

それを、前世で使って知っていたライガットは驚く。

驚いている間にも、モニターには次々と文字が並んでいく。

そこに並べられていく文字は、ライガットがよく知っている懐かしい文字。

・特殊任務

Specialty

・コード0131

Code 0131

・搭乗者登録NO.02

registration number of possenger 02

・死亡確認

Death confirmation

・前管制塔応答無し

No r e s p o s e f r o m a l l c o n t r o l t
o w e r

・識別コード解除

E r a s e i d e n t i f i c a t i o n c o d e

・初期化

I n i t i a l i z a t i o n

日本語がメインの文字の羅列だった。

「どおなつてんだよこれ：?」

ガチャガチャガチャ!

そのころホズル達は地上に向かって階段を駆け上がって、もうじき地上に着くところだった。

「うッ!!!」

しかし、一番前を走っていた兵士が地上に着き、目の前の光景は・・・
・・・真っ赤な血とクリシュナ軍人の多数の死体。

そして、死体の上に横たえた巨大な銃プレスガンを持った、黄色いボディにアテネスの印が左肩と左腕の盾にあるゴウレム・・・アテネス連邦で開発された新型軽量ゴウレム『エルテームス』がいた。まさに地獄のような光景だった。

「ち・・・まだいたか・・・！」

エルテームスの搭乗士、黒い短髪にカチューシャをし、白がメインで襟や裾、袖に赤いラインが入っていて、アテネス連邦の印が右腕に書かれている軍服を着た、17歳の少女が言った。

「面倒だから対人用の散弾を使うか・・・ん!？」

少女はホズルを見て驚き、そして大げさな護衛の理由を理解した。

「!!!!道理で仰々しい護衛だと思ったら・・・クリシュナの国王、ホズル!!!!?ゼス様あ!!!!リイはやりましたよ!!!!」

少女・・・リイは、敬愛する上司の名を呼びながら喜んだ。

そのころライガットは、

ピタッ!!

・搭乗者登録

P a s s e n g e r r e g i s t r a t i o n

N O . 0 3 ?

・保留

・登録

H o l d

E n t r y

ようやく羅列が止まったモニターを見ながら、混乱していた。

「え？何これ？何で日本語？made in Japan!？」

今ここにメガネがいたら『落ち着いてください銀さん!』と言うに
違いない。

それぐらいライガットは、パニック状態だった。

「落ち着け俺・・・まずは現在の状況整理だ」

何とか落ち着こうと状況の整理をすることにした。

「今俺の前にあるのはモニターの文字、これは搭乗者になるかどうかの設定だ。『NO・03?』ってことは、登録すれば3番目の搭乗者になる事になるだろう」

なかなか冷静な判断だ。

と言うか、なんだか楽しそうに見える。

そつたとえるなら、『憧れていたロボットを操縦できるのか!』と
言う感じで、まさに少年の用だ。

前世でいい歳大人でありながら、少年ジャンプを辞められないでい
ただけあって心が成長していないのか？

本人は『男はいつの世代でも少年の心を持つてるもんだ!』と言っているが。

「こりゃ登録するしかないだろ!」

ピッ

・・・・・・・・・・・・・・・・

この男は成長してないだけのような気がする・・・。

パク・・・

バシユッ!

キュイイイイイ!

「おお! 明るくなったな! ってことは電気で動いてんのか?」

どうやら少しは考えているらしい。

登録を押すとシートベルトが締まり、内部が明るくなる。

そして左右にはレバーが出てきた。

レバーには指をかける引き金がついている。

ガンッ

「!？」

突然、採掘場の岩が崩れだし機体が大きく揺れる
それに気を取られて、ライガットは大事な事に気づかなかった。

・外部メイン冷却炉

E x t e r n a l m a i n c o o l i n g f u r n a c e
エラー

の表示に・・・。

ガラガラガラ

「おいおい！冗談じゃねえーぞ！！」

ピッ

ライガットの心拍数が上昇と、外部の危険をプログラムが察知する。

ビイイイイ！！

けたたましい音が鳴り響きながら、アンダー・ゴウレムは一気に地上へとび跳ねた。

緊急自動稼働が始動したのだ。

ホズル達は突然、採掘場から飛び出してきたものに驚く。それが飛んだ高さにも。

「グッ！」

グイッ

ライガットはとっさに掴んだレバーを引く。

バキンッ！

レバーを引いた事で上半身が動き、アンダー・ゴウレムをおおっていた石英が砕け散る。

そこに居たのは、頭部と背中にある、折れた剣の角と背鰭が特徴の、黒銀のゴイレムだった。

ズンッ！

そして物凄い地響きをたて、銃プレスガンを足で踏みつけ着地する。

「クリシュナの新型……！？今、何メール跳ねたんだ……コイツ……」

リイは目の前に現れた黒銀のゴウレム……アンダー・ゴウレムに驚愕する。

今まで、こんなに高く飛ぶゴイレムは見たことなかったからだ。

「……ライガット……！？ライガットなのか！？」

ホズルはまさかと思いながらライガットの名を叫ぶ。

そのころコックピット内部では。

「おえ………気持ち悪……」

ライガットは青い顔でいた。
ふと前のモニターを見ると、

「ゲッ!？」

エルテームスが目の前にいた。
そして、

グイッ

驚いた拍子に右足のペダルを引いてしまった。

ギューン・・・

ズンッ！

そのせいで、銃を抑えていた足をどけてしまうアンダー・ゴウレム。

「「「あ！」「」」

それを見た、全員が驚く。

ライガットに関しては更に顔色が悪くなる。

「俺のバカや野郎！！」

己の失敗を悔やむライガット。
それをチャンスと見たリイは、

バッ

プレスガン
銃を構え、

「お前、面白い奴ッ！！！！だけど死ね！！！！」

アンダー・ゴウレムに向かって撃った。

「しまっ・・・！」

パシユッ

ライガットは焦った。

だが幸運なことに、少しバランスを崩すだけですむ。

「しまった！！対人用のままだった！」

リイは急いで弾を変える。

その間にライガットは、後ろに下がった時の事を思い出していた。

「（今足を乗せている左右のペダル。右足のペダルを引いたら、後ろに下がった）・・・だったら！！」

ガツチャ！

「（ニヤッ）」

弾を装填し終えたリイは、ニヤリと笑い銃口をアンダー・ゴウレムに向ける。

それと同じくして、

「前だ！！！！」

ガッ！

ライガットは勢いよく前にペダルを蹴った。

カッ

ダンッ！

リイが引き金を引くと同時に、アンダー・ゴウレムは勢いよく前に飛び出し、エルテームスへと突っ込む。

「来るなッ！」

その行動に驚いたリイは、弾を撃ち続ける。

「死ねッ！死ねえッ！！」

しかしいくら撃つても、アンダー・ゴウレムの肩の装甲に当たって欠けるだけ。

「当たらないッ・・・！！砲身が歪んだのか！！？」

焦って冷静な判断がなくなったリイ。

そして次の瞬間には、

ドゴンッ！

アンダー・ゴウレムの体当りにより、エルテームスは岩壁にたたきつけられ、搭乗士のリイは気を失い、エルテームスは動かなくなつた。

その光景を啞然とした顔でホズルや兵士達は見ていた。

「ああゝしよっぱなからえらい目にあつたあゝゝ」

ライガットは冷や汗を流しながら言う。
軽い気持ちで搭乗士登録をしたのだから、自業自得だ。

「……死んではいないだろうが……って生きてたら生きてたらで……起きたらまずいだろう。」

キヨロキヨロ

ライガットの目や頭の動きに内部センサーが反応する。

ギユイツ

するとアンダー・ゴウレムの頭部がライガットの動きに合わせて動く。

見渡すと、大破したクリシュナ王国の量産型ゴウレム『ファブニル』のすぐ近くに、ゴウレム装備用の両刃の剣が突き刺さっていた。

グイッ

ズンッ！

「……左足のペダルで方向……？上のレバーで上半身……」

クイッ

ギユツイ……

ライガットは確かめながら操作し、剣の所まで移動する。
手動で動かしているため、ある程度体感的に動かせるようだ。

キュ・・・

ググッ

レバーの引き金を握ることによって、剣を掴む事が出来た。

「握るには、引き金を握りやいいのか・・・」

体感的な動作だったため、ライガットにとって扱いやすいのかも
しれない。

もうコツをつかんできている。

「まだぎこちないが・・・まあ初めてにしてはいいほうだな・・・
・・・ってホズル！」

下にはまだホズル達がいた。

「何まだこんなとこいんだよ！！」

エルテームスに気を取られていたせいでまったく気がついていなか
った。

そして、ホズル達が映っているモニターを見ておかしなことに気が
ついた。

「『不確定生物』？　どう言うことだよこれ？」

ホズル達を指している、この文字に不審を抱く。

「ってかアイツ何か叫んでないか？　たしかこういうのって、外との
会話ができるような仕組みがあるのがお約束だが・・・だあゝ！

畜生！！わかんねえー！！！（わしゃわしゃ）」

操作方法が解らなくいらしながら頭をかくライガット。
外で、ホズルはこう叫んでいた。

「ライガット！！後ろだ！！」

ガシンッ！

「！？」

ライガットは後ろから接近してくる、別のエルテ・ミスに気づく。
しかし、

カンッ！

バスッ！

エルテ・ミスの大口径の銃から放たれた弾は、アンダー・ゴウレムの右肩にあたる。

その大口径の銃の、銃口には刃物が装着されている。

「ヴッ！！！」

このゴウレムの弾は強度が強いらしい。
先っきの奴よりも強力だった。

カカカ！

ガガッ！

おまけに正確な射撃。

アンダー・ゴウレムの装甲が大破していき、

ズズンッ！

ついにはバランスを崩し、仰向けに倒れてしまった。

ザズン！

エルテームスが近くに着地すると、ホズルに銃口を向ける。

【……久しぶりだなホズル！——いや、クリシュナ9世……
……！】

「その声……ゼスか……！」

エルテームスの搭乗士……黒い短髪に黒い瞳の男、白がメインで襟や裾、袖に濃緑のラインが入っている、アテネス連邦の軍服を着たゼスの声か聞こえた。

【動くなよクリシュナ9世！！貴様を拘束する。その前に……】

ギユイツ

大口径の銃の銃口を、アンダー・ゴウレムに向けるゼス。
その行動に慌てて叫ぶホズル。

「待てゼス！そいつにはライガットが乗っているんだ……！」

【……………？くだらん時間稼ぎはよせ。あいつがゴウレムを動かせる訳がない……】

だが、ライガットが『能無し（アン・ソーサラー）』だとよく知るゼスは信じなかった。

「ゼス……」

ライガットは『アッサム国立士官学校』を退学し、故郷に戻る道で崖の上から無言で見送っていたゼスを思い出しながら、啞然としてゼスの言葉を聞いていた。

【ホズル……！貴様を捕らえれば、この愚かな攻略戦は終わる。貴様をここで逃がすわけにはいかん！貴様がたわごとを言う人間ではない事はよく知っているが……ライガットだここに居るはずがない！！】

キッ

ゼスは引き金を引こうとした。
しかし、

ガシッ！

ガンッ！

【！？】

「やめろ！ゼス！！」

ライガットは、撃たれる寸前に大口径の銃を掴み、銃口の向きを変える。

ゼスは、大口径の銃を掴んでいた、アンダーゴーレムの腕を引き離

し、銃口のしたの刃で攻撃しようとしたが、

ガキンッ！

アンダー・ゴウレムの持つ剣で防がれ、

「おおりやああああ！」

【何！】

ゴンッ！

エルテームスは後ろに吹き飛ばされ岩壁に激突する。
アンダー・ゴウレムはホズル達の前に出て剣を構える。

「チッ！結局こうなっちまうってことか・・・クソッ！」

解っていたことだが、胸糞悪い事だ。

【貴様・・・！？】

カカカッ！

エルテームスの向かったの攻撃。

「！！！」

ズドドドド！

「陛下——！！！」

「バルド將軍ッ！！！」

攻撃はバルドがひきいるゴウレム部隊の攻撃だった。

「姿勢低く！構え！！・・・撃て！！」

バルドの指示により、エルテームス目掛けての一斉射撃。
ゼスは飛んで回避し、岩陰のリイの所に隠れる。
そしてゼスも大口径の銃で対抗する。

バスッ

「例の大口径の銃を使う魔道戦士かつ！！！！盾に角度をつけよ！！もろに受けると貫通貫通するぞ！！！！」

バルドは部下達に指示を出す。

「陛下こちらへ！！！！」

【陛下！！よくぞご無事で・・・！！】

ホズルは部下たちによって、無事避難させられた。

「（陛下を保護出来たが、この数でも詰められんとはな・・・もしや噂の弟が指揮する強襲部隊か！？迂回させてる別働隊を待つ方が得策か・・・」

しかし、

ドドッ

カカッ

2機のエルテミスは撤退していき、別働隊を待つ事は叶わなかった。

【敵が撤退していきますッ】

「く・・・深追いするな。陛下の護衛が最優先だ！」

そのころ、

ガチャッ！

ダッ

「ゼエッス・・・！」

アンダー・ゴウレムから降りたライガットは、去っていくエルテミスに向かって叫んだ。

「・・・たく、何やってんだよ・・・オメエーは・・・」

戦闘が終わった後、アンダー・ゴウレムを荷台にくくりつけ、4機のゴウレムが王都にホ込んだ。
城壁の入り口近くでシギユンは、ライガットを探していた。

「・・・・・・・・！ライガット！」

「・・・・・・・・シギユン・・・・」

ライガットを見つけるとすぐさま駆け寄る。

「アンダー・ゴウレムで闘ったって本当！？」

シギユンはライガットに怪我がないか調べる。

「怪我はない！？焦点合ってる！！？」

いつもの無表情で勢いよく聞いてくるシギユンに、呆れながら言うライガット。

「あつてるよ；・・・・・・・・つか、お前ら何調べてんだよ？アレ簡単に動いたじゃねえか。手動で・・・・」

「・・・・・・・・手動・・・・・・・・？」

「・・・・・・・・手動・・・・・・・・」

ザワザワ

その言葉に周りがざわめく。

「ああ、右前にある電げ・・・・・・・・小さな石英みたいなもの。あれ触ったら普通に起動したぜ？」

「・・・・・・・・・・」

ライガットは知らなかった。

その場所が一番あやしく、一カ月前からしらべていたことを。

そして、いくら触れても誰にも反応しなかった事を。

「お前らいつまで仕事してんだよ。」

ライガットは飴を舐めながら呆れて言った。
現在ゴウレム整備場にいる。

何故ライガットが飴を舐めているかと言うと、彼は相当の甘党で、定期的に甘いものを摂取してないとイライラするかららしい。
いい加減にしないと、糖尿病になると思う。

「このゴウレム用に無反応系石英の装甲を研磨してるの」

現在アンダー・ゴウレムについていた装甲は戦闘で大破していたり、腐食していたりしていたため、外されている。

「はぁ・・・？たしかもう使い道がないから解体するって聞いてたが？」

ライガットは壊す事になっているはずのものに装備を作っていることに疑問をもつ。

2時間前に搭乗席の光が消えて、完全に動かなくなり、使えないと判断されて破棄するようにお偉い様から言われたのだ。
ライガットはまだ動くと思っているが。

「ここから先のインナーフレームは外から解体出来ない。私たちの技術では破壊するしかないでしょうね・・・」

「（・・・昔より今の方が技術が下つておかしいだろ；）」

「・・・もしかして中から『命令』で解体出来るのかもね・・・と言っても古代語がわからない私達じゃどうしようもないからな・・・」

「（・・・そのぐらいなら大丈夫だろ）俺わかるぜ・・・」
「・・・え!？」

ライガットの言葉に驚くシギユン。
相変わらず無表情なのは変わらないが。

「解るの？」

「ああ、あれサムライの国の言葉だからな。俺読めるし話せるぜ？」
「・・・サムライの？」

啞然とするシギユン。

しかし不思議ではなかった。

昔からサムライの国についてよく知っていたライガットなら、それぐらい知っていても可笑しくなかった。

そしてこれは、この上なく好都合だ。

「それ教えて」

「気が向いたらな・・・（グイッ）・・・ッ!？」

シギユンはライガットの顔を両手で挟み、自分の方に向かせる。

「お・し・え・て・!」

「・・・はい;」

その返事を聞き手を離すシギユン。

「（ああゝ：心臓に悪ゝ）」

そりゃ好きな人の顔が、いきなりドアップだ。
ドキドキしない方がおかしい。

危うく飴を喉に詰まらせるところだった。

「それにしても・・・何てアンバランスなゴウレムなの・・・」

何でもないように話し出すシギユンに、落ち込むライガット。
しかし顔には一切出していないだけで、シギユンも自分のとった行動にドキドキしているのは、誰にも解らなかった。

「私達は、弾丸や装甲・・・果てはティーカップまで石英でつくる。
古代人は私達と違って熱や油と相性の良い金属という媒体に頼って
たらしいけど・・・このインナーフレームは何故か熱や油と相性の
悪い石英で製造されている」

「（え？そうなの？）」

てっきり金属で出来ていると思っていたライガットは驚く。

「外部装甲は腐食して気泡だらけだけなのに、インナーフレームは
まったく腐食していない・・・」

つまり内側の腐食を防ぐために、金属を使わず、石英を使って出来
ているのだ。

おそらくほかにも理由があるだろうが。

「インナーフレームのように、解明できない技術で石英を精製して
るかと思えば、柔軟系石英の精製技術はすごく稚拙（．．．．．）
．．．まるで．．．何か．．．．．最後の使命（作業）を果たす為
だけに、突貫で造られたような．．．）」
「お——い！」

フルフル

話の途中で黙ったシギユンの顔の前で手を振る。

「．．．ハ！」

「．．．．．おまえな！」

我に返ったシギユンを呆れながら見るライガット。

「．．．．．そうそうライガット。これ動かした時の報告書、書き直
して！」

「はあ！？書いただとが！」

「駄目、書き直し！」

シギユンは、無駄に絵が奇麗に書かれた報告書をつつ返してきた。
その内容はコマで分かれており、コックピットやゴウレムが鮮明に
描かれており、戦闘シーンでは効果音まで書かれている。
もはやこれは報告書ではない。
この世界にはない漫画だ。

「絵じゃなくて字で説明して！！」

「はあゝ！？お前なあ、俺の混信の作にケチつけんのか？それに字
ならあるだろ！」

そう言つて、吹き出しやら、心の声を書いたところを指す。

「セリフじゃなくて説明がほしいの！それにこの『ああ、甘いもん食いてえ〜！』ってなに！！貴方の心の声なんてどうでもいいから！！それに貴方いい加減にしないと本当に糖尿病になるって言つてたでしょ！！」

「俺は甘味から栄養摂取してんだよ」

「甘味から糖は摂取出来ても、栄養なんて摂取出来ないから！！」

ライガットのボケに、無表情ながら突っ込みを入れまくるシギユン。周りの魔動技術士達は作業を続けながらも、いつもと比べて感情を表に出しているシギユンに驚いていた。

「———で？どうやってあの第118採掘場をよじ登つたの？」

シギユンがメモを取ろうと構えながら質問する。

「……いや、ジャンプで上まで上昇した」

「……まじめに答えて……20メートルはあるのよ？」

ちなみに20メートルは約17メートル。

クリシュナのファブニルが10メートルなので、その倍の高さだ。

シギユンはライガットにつめ寄る。

「加速も無しで、そんなに高く跳べる訳ないでしょ！？」

「マジだつつの；ホズルや衛兵達にも聞いてみる！」

「………本当なの……？」

「ああ」

しばらく沈黙が続く。

ライガットとシギユンの顔が近いままで。

「着地時の衝撃は！？体感でいいから！！」

興奮したシギユンは、無表情の顔を更にライガットに近づけ質問する。

さすがに耐えきれなくなったライガット。

「……………あの…………シギユンさん……？」

「何？」

「あまり顔近づけすぎると、さすがにやばいんですけど？俺も『男』なんで」

「！」

かすかに目を見開くシギユン。

スツ……

ようやく離れたシギユンに、ほっとするライガット。

「……………男……………ね…………フツ！」

「（カチンッ）あのシギユンさん？何ですかそれは？（ピクピク）」

シギユンの馬鹿にしたような言い方に、頭にきたライガット。
顔が引きつっている。

「授業中落書きばかりして、絵が上手くなったのはわかりましたから、書き直してくださいね！絵はいりませんから！！」

そう言ってシギユンは去って行った。

「~~~~ツ！」

その態度に対する怒りを表しながら、報告書を書いていく。字ではなく、また絵だが・・・。

シギユンは階段を降りるとき、魔動技術士の男とすれ違い、

「！シギユン様。どうしました、お顔まっ赤ですよ？」
「・・・・・・・・」

男の言っていることを無視して、その場から去った。

シギユンが去ってしばらくして、

「——これが古代人が使っていたガラクタゴウレムか！！」

逆立った金髪の頭で背が低く、太った体系。

黒い軍服には数多くの勲章付けられている50代くらいの男が部下を引きつれ、石英を手のひらで浮かせながらやってきた。

「トウル將軍！！」

「ご帰還なされたのですね！」

「ウム！今しがたな。貴様らもう安心していいぞ！ワシが戻ったからには、もうアテネスの好き勝手にはさせん！」

魔動技術士達はその男の帰還に喜ぶ。

その様子を上から見ていたライガット。

「誰？」

近くにいた魔動技術士に聞く。

「クリシュナ二大將軍の双壁、トウル將軍です」

「ふうん・・・（て言うつと、もう一人はバルドのおっちゃんか・・・）」

バルドに対して、おっちゃん呼ばわり出来るのはライガットぐらいだろう。

「これからはハンガーがいくらあっても足りなくなる。こいつはもう使えんのだろう？さっさと廃棄しろ！邪魔だ！」

アンダー・ゴウレムを指しながらいうトウル。

「あらあ・・・」

その光景を見て、強気なおっちゃんだなと思うライガット。

「しかしシギユン様が、大変ご執着なされてまして・・・」

「む・・・シギユン様が・・・？ならば仕方がないか」

シギユンの名前が出ると、渋々ながら引き下がったトウル。

「いくぞ！」

「はッ」「はッ」「はッ」

トウルは部下達を連れて、その場を後にしようと歩き出す。

その部下達の中、スペードの髪留めでポニーテールをしている褐色の肌の……ライガットがシギユンに抱きつかれているところを上から見ていた女性が立ち止りアンダー・ゴウレムを見上げる。

「ふふん！まるで――フレイク壊れた刃フレイド――だね」

そう言つて女性もトウルの後を追った。

「……好き勝手言われてんなあ、オメエ……使えんだとか邪魔だとか……」

ライガットはアンダー・ゴウレムに語りかけるように言った。

「まあー、気にすることあゝねえよ。俺と弟もよく言われてっからよ」

ライガットは用意された部屋のベッドに横になり、油式のランプを

ながめていた。

「しかし、こんな高価なモンを用意してくれるとわな。毎度シギユンには世話になるよ」

オイルが手に入らないこの大陸では、かなり高価なものだ。それを用意できるシギユンはさすがだと思う。

ふと窓の外を見ると、王座の間が明るい事に気づく。

「アイツ、仕事してんのか・・・継ぎたくないって、外国の留学までして逃げてた奴がよお」

ライガットは昔を思い出しながら言った。

「（それにしても、ありやいったい何なんだよ）」

ライガットはアンダー・ゴウレムを思い出しながら考えた。

「（液晶画面やら日本語やら出てきたから、金属で出来てると思いきや。インナーフレームは石英使ってるし。わけわかんねえーぞ）」

「

ライガットは頭を抱えて考えるが、まったく解らない。

「だーもーやめだ！いくら考えてもきりがねー!!」

しまいにはそう叫んで考えるのを放棄してしまった。
彼らしいと言えば、らしいのだが。

「・・・・・・・・（ゼス・・・テメエはまたくんだろうな・・・・・・・・）」

ー

ライガットは天井を見、親友の事を考えながら眠りにつくのだった。

Silver Blade 第2話（後書き）

第2話、いかがでしたでしょうか？

銀さんだっただけで、体感操作の操縦を使いこなすので、ゼスを吹き飛ばすんじゃないかと思ひ、書いておりました。

ゼスのシーンは原作でもかなり少ないので、今回の話ではちょっとしか登場させられませんでした；

おそらくこれから少ないと思います。

今回も駄文でしたがいかがでしたでしょうか？

次回もなるべく早く更新しますので、お楽しみください！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7572t/>

Silver Blade

2011年11月14日01時00分発行